

はしがき

本書は、「六朝隋唐期社會における宗教文化の役割に関する歴史的研究」のテーマのもと、平成十年度～平成十三年度科學研究費補助金（基盤研究（A）（2））を受けて実施した研究の報告書をもとに出版されたものである。この研究を申請するに当たつての申請書には概ね次のように研究目的が記載されている。

六朝隋唐期において、儒佛道三教を中心とする宗教文化は、相互の多様な緊張關係のもと、あらゆる階層にわたつて重大な影響を及ぼし、この時期の文化の特質を規定したのみならず、社會の安定および變動の原動力となつてきたといえよう。本研究は、六朝隋唐期社會の歴史的展開を準備し推進した重要な要素の一つである宗教文化の役割と、その本質を解明しようと企圖するものである。この時期の社會における個別的な宗教について、分斷的に分析する従來の方法を見なおし、儒佛道三教相互の影響關係はもとより、宗教、個人、社會集團などが内包する、精神的、社會的、政治的緊張關係が生み出すダイナミズムに着目し、宗教文化の総合的な把握を旨とするを目的とする。

四年にわたる研究期間の間に、都合六回の研究會が開催され、十一人の研究分擔者による研究報告が行われた。ここに收められた九篇の論考は、研究會での討論をもとに、その後の各自の研究成果を加味して最終的に纏められたものである。

i
巻頭の吉川忠夫「孝と佛教」は、中國古代社會にあつて終始最も基本的な徳目であつた「孝」をめぐる、出家

主義と僧侶の剃髮制度のもと一見「孝」を否定するかの如き佛教と傳統社會との間に生じた軋轢の諸相、並びにその矛盾の中から見い出されてきた中國佛教独自の「孝」にかかわる教理思想の成立の過程を検討する。具體的には、孝の立場に基づく排佛論と佛教側の反論および傳統的な孝の徳を宣揚する佛典の出現を三教の資料に即して論述している。

「孝」をめぐる論争の主役は、あくまでも儒佛二教ではあったが、道教もこの問題に無関係ではありえなかった。道教は基本的には儒教同様、佛教の教理や制度が内包する「孝」に對する否定的側面を批判する立場に立っていたが、一方では、親子の間の肉體的な生命繼承の背後にある「道氣」のはたらきに着目し、それこそが眞の父母であるという「眞父母」の概念を説いて、世俗的な「孝」を超越する傾向をも示した。麥谷邦夫「眞父母考」はこの點を考究したものである。

船山徹「五六世紀の佛教における破戒と異端」は、大乘の興起以前より傳統的に守られてきた戒律のうち最も重罪とみなされた四波羅夷について、淫戒と殺戒には一部大乘特有の局面が認められること、大妄語戒に關しては、中國佛教特有の聖者論がかえって大乘を騙る事件を生むことにもなった可能性のあること、そして傳統佛教の側からは破戒や異端と思われた大乘僧の中に、直後の時代に影響を與えた人物がいたことを指摘し、隋唐以前における大乘佛教の特徴の一端を明かにする。

戒律の問題は、次第に教團制度を整えつつあった道教にとっても重要な問題であった。道教の戒律は、道教教團内部での自律的規則として自然發生的に成立してきた部分と、佛教教團の戒律との關係でより精細に體系化されていった部分とに大別することができよう。都築晶子「道觀における戒律の成立」は、『洞玄靈寶千真科』と『四分律刪繁補闕行事鈔』との類似、とりわけ遷化堂と無常院という臨終の空間のしつらえに注目して、道觀におけ

る戒律の成立を明かにしようとしたものである。

神塚淑子「六朝靈寶經に見える本生譚」は、『太上靈寶諸天內音自然玉字』に見える天真皇人の本生譚と『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』に見える靈寶天尊・左玄真人・右玄真人の本生譚を例にとりながら、佛教の本生譚を模倣した話がそれぞれの靈寶經の中にどのように組み込まれているかを詳しく検討することによって、前者は、靈寶派の宗教思想の重要な要素を導入し、新しい道教の神格像を描いたものであったこと、後者は、道像における三尊構成などに反映されるとともに、六朝隋唐初期の道教の教團や信者たちの実際の行動にも關わる重要な意味を持っていたことなどを指摘している。

漢から六朝期の資料に頻出する「通儒」という語に注目し、その語義の變遷を分析することによって、この時期の學術のありかたの一端を明かにしようとしたのが、木島史雄「中世通儒考」である。「通儒」という語彙には「多くの經書に高い學識を持つ學者」という、現在最も通行している語義だけでなく、「寛政を行うもの」といった意味や具體性を喪失した單なる通儒的「存在」を意味する場合があることが指摘されている。

南北朝初期に普及しはじめた義疏の學は、經書の解釋とともに佛典の解釋にも用いられ、兩者の間には多くの共通點と相互交渉の跡が見られる。なかんづく、講經の場における都講の存在をめぐっては、その起源や變遷について諸説入り亂れての論争が展開されてきた。古勝隆一「都講の再検討」は、従来の諸説の問題點を再検討したうえで、南北朝義疏學における都講の制は、漢代儒學のそれを基礎にしつつ、東晉以後、佛教にも取り入れられたものであると結論する。

荒牧典俊「則天武后乃至玄宗朝における唐詩・山水畫の成立と六祖慧能の禪」は、いわゆる「唐宋の變革」と「中國禪」の展開が表裏一體の歴史的過程であるという假説のもとに、この時期を代表する文化創造者の一人王維

において、唐詩及び山水畫が新しい文化創造として創造されつつあること、かれの文化創造の根源において生きている根本の宗教體驗としての、六祖慧能にはじまる南宗禪のインスピレーションがどのような根本構造をもつかを、詩語としての「空」の意味の根本轉回および「輞川詩」と「輞川圖」の對比から見られる詩畫一體の文化創造を例に論證する。

現代的常識からは一見相反する存在に思える宗教と科學、この兩者が渾然と複合して一つの學問分野を形成していたのが前近代的ありかたであり、中國にあつてそれを最も特徴的に示すのが、占いと科學理論が複合的に絡みあつた術數學であつた。武田時昌「中世の數學と術數學」は、中國古代の數學書である算經の記述と男女生み分け法を例にとりながら、術數學が生み出した時空において、當時の科學や易學の理論と宗教文化の構成要素が習合し、人々に何らかの信仰と行動指針を與える力となつていたことを指摘する。

以上、九篇の論考の内容をかいつまんで紹介した。上記の研究目的の何程が達成されたかは大方のご批判に委ねるとして、少くともその目的を達成することを目指して、それぞれに興味深いテーマを取りあげ、新しい知見の呈示を試みたものであるといえよう。

この小冊の編集、出版の勞を擔つたものとしては、本書の刊行が中國中世社會における宗教文化の持つ意味の解明に些かなりとも寄與し得ることを願うものである。

二〇〇二年四月

麥谷 邦夫